

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

先住民から学び、変容する学問をめざして：
共同研究：政治的分類：
被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 好信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008492

共同研究 ● 政治的分類—被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する（2014-2017年度）

ジェイムズ・タリー教授を迎えて

本共同研究は、支配の対象として集団化されてきた人びとの視点にもとづき人種やエスニシティという概念を再考することから始まった。たとえば、被支配者にも支配者を人種やエスニシティとして名指すことばがあるのは、よく知られている。たとえば、マヤ・カクチケル語のカシュラン、ハワイ語のハオレ、アイヌ語のシャモ、沖縄県のシマクトゥバでは、ヤマトゥなど。現在でもこれらの対抗的概念が流通している理由は、コロニアルな構造が依然として持続しているからである。人種やエスニシティが自然界や社会的差異に関する客観的分類ではなく、政治的分類であることがわかる。

本共同研究では、いま述べた理解を手掛かりに、次のようなより大きな課題の探究へと向かった。文化人類学はこれまでのように他者からの名指しをローカル化された人種やエスニシティの事例として扱うことをやめ、その名指しを自己への呼びかけとして受け取り、現在でも持続するコロニアリズムにおいて他者と相対するために必要な倫理を探るべきではないか、と。これは、文化人類学の脱植民地化、つまりポストコロニアルな学問として文化人類学を再想像する試みへと連なる課題である。

さて、2016年度第3回共同研究会（2016年10月29日開催）には、ジェイムズ・タリー（James Tully）カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授を特別講師としてお迎えし、文化人類学だけではなく広く人文学全体を脱植民地化するためにどのような実践があるのか、カナダですすでにおこなわれてきた事例を含め、ご紹介いただいた。タリー教授の招聘は、本共同研究のメンバーである辻康夫（北海道大学）の尽力により可能になったものであり、ここに謝辞を記したい。

先住民の視点を含めたカナダ史の書き換え

タリー教授は、17世紀英国の政治哲学者ジョン・ロックの思想を研究する哲学者として出発した。現在では、カナダにおける承認の政治学、先住民の自己決定権、多文化主義など、

公共哲学という領域において革新的業績を残している政治哲学者である（たとえば、Tully 2008）。

20世紀も最後の10年にさしかかるところ、彼が教鞭をとっていたカナダでは、「オカの危機」に代表される先住民と政府との対立が激化していた。1991年、カナダ政府は対立関係を修復するため、リベラル民主主義国家の特徴である多様性という理念のもと、入植者と先住民との歴史的関係を踏まえ、そのうえでどのような未来に向けた関係を構築できるのか、という目標をもった「先住民に関する王立委員会」の設立を宣言した。タリー教授は、この委員会の創設時からの主要メンバーの1人であり、1996年には全5巻に及ぶ『報告書』の作成にも携わった。西洋哲学の碩学は、カナダ社会が直面する課題との格闘を通し、知的変貌を遂げている。

メンバーの半数が先住民で構成されたこの委員会は、カナダの歴史を書き換える作業をその中心的課題としていた。前提となっていたのは、カナダが先住民から土地を篡奪し成立した入植者国家だという歴史観である。タリー教授は、脱植民地化を進めるために、まずこの歴史観の共有から始める以外には選択肢はないのではないかという立場をとる。

再隆盛と和解—知的自己決定権の行使

タリー教授の発表には、カナダでは学問も脱植民地化されつつあるという指摘があった。発表のなかで脱植民地化とは、先住民の学生が増加し、大学における研究教育職をもつ先住民も増加していった結果、先住民研究（Indigenous Studies, Native Studies）が成長したことを意味する。つまり、知的自己決定権の行使ともいえる状況がうまれている。

このような変化は、カナダにおける「再隆盛と和解」という政治的課題を背景としている。再隆盛とは、先住民が自らの土地において経済的自立を確保し、言語、宗教、文化を再活性化し、互酬性など先住民の世界観に基づき、周囲の環境との関係を樹立する努力であり、それがカナダにおける先住民と入植者たちとの和解の前提となる。



グアテマラ共和国チマルテナンゴ県のある町。2006年、役場には、町の歴史を描く壁画が作成されたが（左写真）、2012年夏、壁画は消去されてしまった（右写真）。記憶をめぐる争いの結果である（太田好信撮影）。

認識論的・倫理的謙遜

最後に、タリー教授は自らの思想の根幹は、認識論的・倫理的謙遜にあると締めくくった。わたしはそれを、政治哲学者がカナダの先住民から学び、自己を変容させた経験に基づく発言と受け止めた。自らの理解がつねに不完全であるという前提に立ち、誤謬を正す勇気をもつこと、もし誤った結論を自覚したときは、躊躇なくふたたびやり直す努力を惜しまないことだという。

冒頭で示したように、本共同研究の現在における到達点は、文化人類学の脱植民地化には、コロナリズムが現在に与える影響を自覚し、いま一度、他者と相対する倫理を構築することを目指すことである。他者と相対するためには、まず、文化人類学者が自らの理論的力により他者を完全に掌握できるという確信を疑い、コロナリズムの歴史を背負うという自覚のもと、自己を他者に対して開くことが求められる。その典型が、先住民と文化人類学者との関係だろう。

タリー教授との対話から、政治学、哲学、歴史学の諸分野とならんで、文化人類学も先住民研究との対話を通し、ポストコロナルな姿に変容しうる具体的な道筋を垣間見た気がした。

フランツ・ボアズとジョージ・ハント

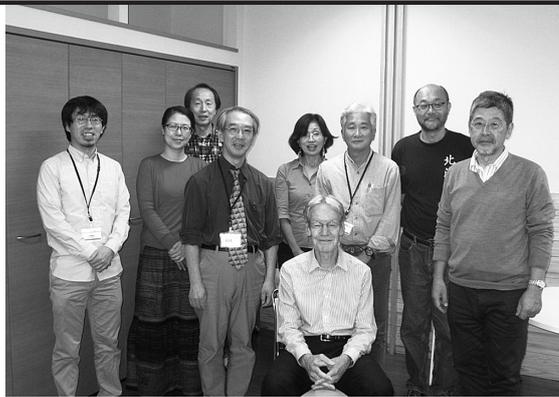
タリー教授の発表だけではなく、その後におこなわれた討論、ならびに懇親会の席で、さらにはそれ以降のタリー教授とのメールでのやり取りから、新たな発見もあった。

2011年、米国イェール大学では、ボアズの主著の1冊『未開人の精神』（1911年）の刊行1世紀を記念するシンポジウムが開催されている。その成果は、『先住民のヴィジョン—フランツ・ボアズの世界を再発見する』にまとめられる予定であると聞く。タリー教授もその編著に寄稿しており、そのなかでボアズの著作に第二の生命を吹き込むかのような、刺激的読解を披露している（Tully forthcoming）。

タリー教授によれば、19世紀から20世紀にかけてボアズは、ヨーロッパの帝国主義的拡張を正当化する「未開／文明の世界観」を批判し、それによって隠されてきた別の価値観、すなわち彼がカナダ北西海岸地域の先住民たちから学んだ「平等／多様性の世界観」を提示した。ボアズの人種論批判は、グローバル規模での人類共同体の提案でもあったという。その成果が、『未開人の精神』に存分に発揮されていると解釈している。

ボアズのいう文化人類学的啓蒙とは、西洋社会において自然化している考え——「二次的説明」——を意識化し、知的解放への道を示すことである、とこれまでジョージ・ストックングらも指摘してきた。けれども、タリー教授はより大胆である。つまり、ボアズが文化的特徴の分布を説明するとき援用していた（古めかしい）伝播論を読み替え、21世紀と共振する「平等、結びつき、互酬性、変容」などというグローバル化の考え方をボアズは先取していたという。わたしは、この斬新な解釈にたいへん驚いた。

しかも、ボアズはこのような考えを、白人の父、トリン



ジェームズ・タリー教授を囲んで（2016年10月29日、国立民族学博物館、辻康夫撮影）。

ギットの母をもち、自らをクワクワカクの一員として認識していたジョージ・ハントらとの交流から学んだというのである。タリー教授が指導した歴史家アイゼア・ウィルナーは、ハントが残した資料とボアズの論文などを比較し、以上のような結論を導き出した（Wilner 2016）。それは、グローバル意識の起源を先住民に求めた解釈であるといえる。

1862年、天然痘の流行はすでに疲弊していたクワクワカク社会にさらなる打撃を与える。ボアズはそんな状態にあった場所に到着する。ボアズはクワクワカク名まで与えられ、ポトラッチへの参加を許されてもいた。ウィルナーは次のように問う。クワクワカク社会についての描写を多数残したハントは、ボアズに何を託したかったのだろうか、と。ハントは、ボアズにクワクワカクの神話、舞踊、演説などを通し、人間の可塑性、変容する能力、再創造しつづける力を示していた、とウィルナーは述べている。この経験から、ボアズにとり、文化は境界により区分された静的システムではなく、変容し続ける動態であり、プロセスとして捉えるべき概念になったという。

先住民のエイジェンシーに着目する視点から、ボアズとハントとの邂逅を再評価する作業は、文化人類学者にとっても魅力的である。これまでストックングらの歴史的解釈の結果、ボアズはヘルダーやフンボルトのドイツ・ロマン派の影響を受けた思想家とされてきた。その解釈を完全に否定するものではないが、ボアズは北西海岸地域の変容する先住民社会との出会いの記憶を通して、さらなる知的変貌を遂げた可能性が開かれた。タリー教授の経験と同じように、先住民との対話を通し、ボアズは先住民から学んだ「平等／多様性の世界観」を世界に伝える存在へと変身したのである。

コロナリズムが他者に関する知識の集積を可能にしたシステムであり、その知識を先住民から与えられた贈与として捉え直せば、21世紀における脱植民地化とはそれら集積した知識をどのように返還するか、受け取った贈与に対しどう返礼をするか、という問いについて考えることになる。

【参考文献】

- Tully, James Forthcoming. Rediscovering the World of Franz Boas: Anthropology, Equality/Diversity, and World Peace. In N. Blackhawk and I. Wilner, (eds.) *Indigenous Visions*. New Haven: Yale University Press.
- . 2008 *Philosophy in a New Key* (Volume 1 and 2). Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilner, Isaiah Lorado 2016 *Raven Cried for Me: Narratives of Transformation on the Northwest Coast of America*. Ph.D. dissertation, Department of History, Yale University.

おおた よしのぶ

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は、文化理論、先住民運動（とくに、グアテマラ共和国・マヤ民族）。著書に『増補版・トランスポジションの思想』（世界思想社 2010年）、『亡霊としての歴史』（人文書院 2008年）。編著に『政治的アイデンティティの人類学』（昭和堂 2012年）など。